妙法蓮華経訓読史叙述のための基礎作業

小林芳規

一、方法・資料と訓読文例示

漢文訓読史の叙述を課題としてその訓読法の変遷について、筆者は、夙に、再読字[1]を始めとして、連文の助字「及」[2]、文末の助字「而已・耳」[3]等の助字、副詞に訓読されて一定の呼応関係を持つ「況」字[4]等の呼応語、並びに原漢文に当該漢字は無いが日本語として訓読するに当って読添えられる助詞・助動詞・形式語などのうち、助詞「い」[5]等を、個別的に取上げて、その時代差の実態を調べ、変遷の原理を探って来た。この方法には、個別的な事象を唯数多く積み重ねても、体系的な視点を欠くならば、変遷の全体像を解明するには至らないという限界があった。筆者は、これを自らの漢文訓読史研究の第一段階と位置づけている。

この限界を越えるための、第二段階として、同一本文の経典で加点時代を異にする二点本を取上げて、その訓読文の全文を逐一比較し、類別することによって、変遷の類型を求める方法を試みて来た。大唐三蔵玄奘法師表啓[6]・金剛般若経集験記[7]・大唐西域記[8]・観弥勒上生兜率天経賛[9]などにおける、平安初期加点本と院政期訓点本とを比較し考察したのは、この意図に出るものであった。

小稿は、方法上、この第二段階の線上に在るものであるが、今よで採った方法が平安初期と院政期との二文献を取上げて比較したのに対して、同一本文の経典について、平安初期から鎌倉時代までの各時代の古点本を取上げた点に異なりがある。そこに、第三段階の方法を模索せんとする意図もある。

取上げるべき経典としては、次の条件を満たす必要がある。

一、平安初期の訓点本が現存すること。

二、平安中期以降、鎌倉時代に至る各時期の訓点本が現存すること。

三、平安後半期以降の訓点本については、異なった宗派の訓点本が現存すること。

右の三つの条件を完全に充足する資料を得ることは極めて難しいが、妙法蓮華経が比較的良くこの条件に適っている。

妙法蓮華経の古点本で、平安初期から鎌倉時代までに加点され現存するものは、三十五点余が知られる。それらには、八巻の全巻が完存しているものもあるが、何れかの巻を欠くか、特定の巻だけ或いは二十八品のうちの特定の品しか現存しないものも少なくない。同一本文の訓読法の比較のためには、同じ巻、或いは同じ品の本文が各時代に亘って存することが必要である。この事を考慮して、先ずは、妙法蓮華経巻第一方便品を取上げて、その各時代の訓点本について、全文の訓読文を作成し、その相互の比較を行うことにする。

妙法蓮華経の平安初期から鎌倉時代までの古点本については別稿に掲げ、就中に、方便品を持つ古点本で訓読法の比較に用いた諸本の概要についても述べたので、(10) ここでは再述することを避け、訓点について、加点時期とヲコト点及び加点者の系統を中心に述べることにする。

[1] 山田嘉造氏旧蔵箕面学園蔵妙法蓮華経方便品平安初期点（「山田本」と略称する）　一巻

平安初期前半期（九世紀前半）白点、ヲコト点は第一群点、その点法と仮名字体とから、加点者は東大寺関係の学侶と推定される。訓読文は、原本調査に基づく新古二種のうち新点に拠り、大坪併治博士の解読(11)に負う所が大きい。

[2] 高野山龍光院蔵妙法蓮華経明算加点本（「龍光院本」と略称する）　七巻（巻第三欠）

平安後期白点、ヲコト点は中院僧正点、加点者は巻第一、巻第二、巻第八の巻末自書によって明算であることが分る。

（巻第一、奥書）（自書）「願以此縁　不経三祇　一念之間　速證佛位　釈子明算」

明算（一〇二一―一〇六）は、真言宗、中院流の始祖で、大毗盧遮那経七帖を天喜六年（一〇五八）に小野阿闍梨御房（随心院曼荼羅寺の成尊）の許で大師御点本で読み、又、大毗盧遮那供養次第法疏巻下一帖を康平二年

（一〇五九）に曼荼羅寺で受学している。妙法蓮華経の加点もその頃であろう。訓読文は、原本調査に基づくが、大坪併治博士の労作[12]を参照した。

[3]書陵部蔵妙法蓮華経平安後期点（「書陵部本」と略称する）　八巻

平安後期白点、ヲコト点は禅林寺点、禅林寺点の使用者は、真言宗小野流、禅林寺僧正（第五代）深覚、禅林寺大僧都（第六代）深観の流である。深覚は、仁和寺の寛朝の資でもある。この白点とは別に、新白点（ヲコト点・円堂点）が巻第一にあり、朱点（ヲコト点・円堂点）が巻第一と巻第二とにある。共に平安後期の加点である。他に、鎌倉中期及び室町初期の墨点、室町時代の朱句切点もある。訓読文は白点に扱っている。本書の訓読文は未公刊である。

[4]立本寺蔵妙法蓮華経寛治元年点（「立本寺本」と略称する）　六巻（巻第二、六欠）

寛治元年（一〇八七）に、興福寺において、同寺僧の経朝が、同じ興福寺僧の赤穂珣照の点本によって、白点を以て移点したものであることが、巻第一・三・四・五・七の奥書から分る。ヲコト点は喜多院点。

（巻第一、奥書）

（白書）「寛治元年丁歳次卯五月九日於興福寺上階馬道以西"
第六大房／移点了　本経赤穂珣照君点本也
末学沙門経朝之」

（朱書）以朱處々所移点者是明詮僧都点道本也」

この朱書の奥書からも知られるように、白点とは別に朱書にて、平安初期の明詮の訓読を、白点の読みと異なる所について、寛治二年に加筆している。他に朱で定慶の音読、墨で寿慶の訓並びに音を加えている。訓読文は、原本調査に基づき、寛治元年の白点に扱っている。朱書の明詮の訓読については、参勘したが、小稿には言及してない。白点については門前正彦氏の解読文[13]が公刊されている。

[5]防府天満宮蔵妙法蓮華経（真言宗）　八巻

[6]防府天満宮蔵妙法蓮華経（山門派）

院政初期書写の本文に対して、室町初期に書加えた訓点及び墨が存する。訓点には、朱書訓点と墨書仮名との二種が存し、これがそれぞれ鎌倉時代に真言宗関係僧と天台宗山門派の僧によって加点されたものを移写したものであることが、巻第一の奥書と訓点の訓読

法とから知られる。

（巻第一、奥書）天台／為一具加墨点了同句

古本云

建長八年丙辰八月十四日以禅忍房道本於尊光院

写之執筆堯遍　四十歳

生〻世〻値遇修学　面ノ上下注ヲ裏ニ書了

写本云

嘉祿三年九月五日道了六ケ日　安貞二年五月十七日

至十九日三ケ日間／於尺迦堂訓読了聴衆十余人

嘉禎二年五月廿日於文殊堂読了　寛元三年

八月廿七日玄賛読了

乗心　并院円輪於四人聴衆

應永廿五年戊戌五月十六日読了　読日　首尾五十

余日於新浄土寺聴衆五人

堯春公　於唐院加点　明尊惣覚　俗法十二夏

大安寺読師

この奥書は、本奥書として二種のそれぞれ異なる系統の本を併記している。第一種は、「古本云」として建長八年（一二五六）に堯遍が禅忍房道本を以て書写した本の奥書を移写したものである。「堯遍」は、真言宗小野流の醍醐山座主成賢（一一六一―一二三一）の孫弟子と見られ、高山寺蔵本の中にも建長七年の堯遍の奥書を伝えた本その他があり、禅忍房も高山寺の明恵上人の弟子の明信と見られ、高山寺蔵本の中に屢〻その名が見られる。

第二種は、「写本云」として嘉祿三年（一二二七）以下寛元三年（一二四五）に至る「道了」や「読了」等の奥書を移写したものである。「尺迦堂」「文殊堂」は、天台宗の比叡山の塔頭であり、嘉祿三年以下安貞二年（一二二八）、嘉禎二年（一二三六）、寛元三年の識語は、比叡山で妙法蓮華経が読み継がれたことを反映する。この本を参勘しつつ、応永二十五年（一四一八）以後に、同じ比叡山の唐院で、僧明尊が妙法蓮華経に加点したのが、この防府天満宮蔵本である。

防府天満宮蔵本の本文に施された訓点のうち、朱書訓点は仮名とヲコト点とであり、巻第一の全巻と巻第二の巻首に施されている。ヲコト点は喜多院点であり、この点法が院政期以降は真言宗の中でも用いられたから、「古本云」の堯遍の識語に対応し、訓読法の上からも真言宗の性格を示している。

これに対して、墨書仮名は、八巻全巻に亘って書入れられてあり、巻第一奥書の最初にある「天台ノ為一具加墨点了同句」に照応し、更に「字本云」の嘉祥三年以下寛元三年の奥書が天台宗の読みを反映するのに対応するものである。これらについては別に述べた所である。訓読文の引用に当っては、朱書訓点を「防府本（真言宗）」と略称し、墨書仮名を「防府本（山門派）」と略称する。

[7] 倭点法華経（心空版）（「倭点本」と略称する）　八巻

嘉慶元年（一三八七）開板。応永五年（一三九八）の重刊本で、滋賀県長浜市八幡宮蔵本（勉誠社刊、中田祝夫博士編『倭点法華経』）による。その訓点の示す訓読の系統は、刊記からは定かでないが、心空が貞治年間（一三六二―一三六七、四十四歳から四十九歳の間）に天台宗の書写山円教寺の僧であった（同書解題）ことによると、天台宗における妙法蓮華経の訓読に拠ったことが考えられる。倭点法華経の訓読が、防府本の山門派の訓読に極めて近いこともその一証となる。

右の七種の古点本に併せて、鎌倉時代書写の仮名書法華経の二本を掲げる。その文章は、基本的には妙法蓮華経の古点本の訓読に基づいていると考えられ、仮名書である所から、原漢文の各字の訓読が逐一、明らかに知られる利点があるからである。

[8] 妙一記念館本仮名書法華経（「妙一記念館本」と略称する）　八帖

鎌倉中期書写。中田祝夫博士編、霊友会刊の影印本文による。

[9] 足利本仮名書法華経（「足利本」と略称する）　八巻

鑁阿寺蔵、元徳二年（一三三〇）頃書写。巻第一の末尾に、「元徳二年壬午六廿四句切已」（朱書）とある。中田祝夫博士編、勉誠社刊の影印本文による。

以上の、九種の妙法蓮華経についてその方便品の訓読文を作成し、相互に比較し考察する。比較に当っては、原典の漢文を、大正新脩大蔵経所収の本文によって、それぞれの初めに示した。

小稿では紙数の都合でその全容を示すことが出来ないので、以下には、その一部分を例示することにする。

（訓読文例二）

	除諸菩薩	信力堅固者	諸佛弟子衆	曾供養諸佛
【山田本】	諸の菩薩衆の	信力堅固にしたまひて(アル)者をは除(カ)マくのみ	諸佛の弟子衆の	曾し諸佛を供養(シ)タテ
【龍光院本】	諸の菩薩衆の	信力堅固なる者を除く・	諸佛の弟子衆の	曾し諸佛を供養(シ)タテ
【書陵部本】	諸(ノ)菩薩衆(ノ)	信力堅固ナル者(ヲ)	諸佛(ノ)弟子衆(ノ)	曾(シ)諸佛(ヲ)供養(シ)
【立本寺本】	諸の菩薩衆の	信力堅固なる者をは除(ノ)	諸佛の弟子衆の	曾し諸佛を供養(シ)タテ
【防府本(真言宗)】	諸の菩薩衆の	信力堅固なる者は除ク	諸佛の弟子衆の	曾し諸佛を供養(シ)タテ
【防府本(山門派)】	諸ノ菩薩衆ノ	信力堅固ナル者ヲハ除(ノ)	諸佛ノ弟子衆(ノ)	曾シ諸佛ヲ供養シ
【俵点本】	諸ノ菩薩衆ノ	信力堅固ナル者ヲハ除ク	諸佛ノ弟子衆(ノ)	曾シ諸佛ヲ供養シ
【妙一記念館本】	もろもろの菩薩衆の	信力堅固なるものをは おく・	諸佛の弟子衆の	むかし諸佛を供養し・
【足利本】	もろくの菩薩しゆの・	しんりきけんこなるものをは をく・	諸佛のてしゆの・	むかし諸佛をくやうし・

	一切漏	已盡	住是最後身	如是諸人等	其力所不堪
【山田本】	マツリ一切の漏	已に盡して	是の最後身に 住せる	是の如キ諸の人等も	其の力 堪ヒ不所なり
【龍光院本】	マツリ一切の漏	已に盡レ・	是の最後身に 住せる	是(ノ)如(キ)諸の人等も	其(ノ)力 堪(ヘ)不(ル)所なり・
【書陵部本】	一切の漏	已に盡セリ	是(ノ)最後身に 住セル	是(ノ)如(キ)諸の人等	其(ノ)力 堪ヘ不(ル)所(ナリ)
【立本寺本】	マツリ一切の漏を	已に盡シ	是の最後身に 住せる	是(ノ)如き諸の人等も	其の力 堪ヘ不る所なり・
【防府本(真言宗)】	マツリ一切の漏を	已に盡して	是の最後身に 住(セル)	是(ノ)如き諸の人等も	其の力 堪(ヘ)不(ル)所(ナリ)
【防府本(山門派)】	一切ノ漏	已ニ盡シテ	是ノ最後身ニ 住セル	是(ノ)如キノ諸ノ人等	其ノ力 堪ヘ不(ル)所ナリ
【俵点本】	一切ノ漏	已ニ盡シテ	是ノ最後身ニ 住セル	是(ノ)如キノ諸ノ人等	其ノ力 堪ヘ不(ル)所ナリ
【妙一記念館本】	一切の漏	すでに・つくして・	この最後身に 住せる・	かくのごときもろもろのひとらも・	そのちからたへざるところなり・
【足利本】	一さひのほんなう	すでにつくして・	このさいこしんに・	ちうせる・かくのごときもろくのひとらも・	そのちから・たゑざるところなり・

	假使満世間	皆如舎利弗	盡思	共度量	不能測佛智
【山田本】	假使 世間に満(テラ)むひと皆	舎利弗の如(ク)あらむい	思を盡(シ)て共に	度量すとも	佛の智とは
【龍光院本】	假使 世間に満て(ラム)もの皆	舎利弗の如(クシ)て	思に盡(セ)て共に	度量(ス)とも	佛智を
【書陵部本】	假使世間(ニ)満(テラム)モノ皆	舎利弗の如クシて	思を盡シて 共に	度量(スト)モ	佛智をは
【立本寺本】	假使世間に満(テ)ラムモノ皆	舎利弗の如クして	思を盡して 共に	度量すとも	佛智をは
【防府本(裏書)】	假使世間に満(テ)ラムモノ皆	舎利弗の如(クシテ)	思を盡(シ)て 共(ニ)	度量すとも	佛智をは
【防府本(山間派)】	假使 世間ニ満(テラムモノ)皆	舎利弗ノ如クニシテ	思ヲ盡シテ 共ニ	度量スレトモ	佛智ヲ
【倭点本】	假使 世間ニ満テラム(モノ)皆	舎利弗ノ如クニシテ	思ヲ盡シテ 共ニ	度量ストモ	佛智ヲ
【妙一記念館本】	たとひ 世間に みてらむもの	みな・舎利弗の ことくならむ・	おもひをつくしてともに・	度量すとも・	佛智を
【足利本】	たとひ せけんに・みてらんもの・	みなしやりほつの・ことくならん・	思をつくして・ともに	たくりやうすとも・	ふつちを・

	正使 満十方	皆如舎利弗	及 餘諸弟子
【山田本】	測(ル)こと能(ハ)不なり	政使十方に満(テラ)むひとの皆	舎利弗の如(ク)あらむと【及】餘の諸の
【龍光院本】	測ること 能(ハ)不・	正使 十方に満て(ラム)もの 皆	舎利弗と 及ひ 餘の諸の
【書陵部本】	測(ルコト) 能(ハ)不	正使 十方に満(テラム)モノ 皆	舎利弗と 及ヒ 餘の諸の
【立本寺本】	測(ル)こと 能(ハ)不	正使十方に満(テ)ラム モノ 皆	舎利弗と 及ヒ 餘の諸の
【防府本(裏書)】	測(ルコト) 能(ハ)不	正使 十方に満(テラム モノ) 皆	舎利弗と 及(ヒ) 餘の諸の
【防府本(山間派)】	測ルコト 能(ハ)不	正使十方ニ満(テ)ラム(モノ) 皆	舎利弗ノ如ク 及ヒ 餘ノ諸ノ
【倭点本】	測ルコト 能(ハ)不	正使十方ニ満(テ)ラム(モノ) 皆	舎利弗ノ如ク 及ヒ 餘ノ諸ノ
【妙一記念館本】	はかることあたはし・	たとひ十方に みてらむもの	みな 舎利弗のことくならん およひ 餘のもろもろの
【足利本】	はかることあたはし・	たとひ十方に・みてらんもの・	みなしやりほつのことくならん・おもひよのもろくの

亦満十方刹　盡思　共度量　亦復不能知

[山田本] 弟子の　亦　十方(ノ)刹に満(チ)てあらむとい　思を盡(シ)て　共に　度量すとも　亦復　知(ル)こと
[龍光院本] 弟子との如(クシ)て　亦　十方の刹に満(チ)て　思を盡(シ)て　共に　度量(ス)とも　亦復　知ること
[書陵部本] 弟子との如クシて　亦　十方の刹に満(チ)て　思(ヲ)盡(シテ)　共に　度量ストモ　亦復　知(ルコト)
[立本寺本] 弟子との如(ク)して　亦　十方の刹に満テて　思を盡して　共に　度量すとも　亦復　知(ル)こと
[防府本(真言宗)] 弟子との如(ク)して　亦　十方の刹に満(チ)て　思を盡(シ)て　共(ニ)　度量すとも　亦復　知(ル)こと
[防府本(山門派)] 弟子　亦　十方ノ刹ニ満テラム　思ヲ盡シテ　共に　度量スレトモ　亦復　知ルコト
[倭点本] 弟子　亦　十方ノ刹ニ満テラム　思ヲ盡シテ　共ニ　度量ストモ　亦復　知ルコト
[妙記念館本] 弟子　また・十方の刹にみてらむ　おもひをつくして・ともに　度量すとも　またまたしること
[足利本] てし・　又　十方のせつにみてらん・　おもひをつくして・ともにわたしはかるとも・又くしること

能(ハ)不なり　辟支佛利智　無漏最後身　亦満十方界　其數如竹林
[山田本] 能(ハ)不　辟支佛の利智ありて无漏(ノ)最後身ならむが亦　十方界に満(テテ)むこと其の數竹林の
[龍光院本] 能(ハ)不　辟支佛の利智・ありて無漏の最後身なる　亦　十方界に満(チ)て　其(ノ)數竹林の
[書陵部本] 能(ハ)不　辟支佛(ノ)利智　アリ(テ)无漏(ノ)最後身ニシて　亦　十方界(ニ)満(チテ)　其(ノ)數竹林(ノ)
[立本寺本] 能(ハ)不・　辟支佛の利智ありて無漏の最後身なる　亦　十方界に満テて　其の數竹林の
[防府本(真言宗)] 能(ハ)不　辟支佛の利智　ありて無漏の最後身なる　亦　十方界に満(チ)て　其の數竹林の
[防府本(山門派)] 能(ハ)不　辟支佛ノ利智ニシテ無漏ノ最後身ナル　亦　十方界ニ満(チ)テ　其ノ數竹林ノ
[倭点本] 能(ハ)不　辟支佛ノ利智ニシテ無漏ノ最後身ナル　亦　十方界ニ満(チ)テ　其ノ數竹林ノ
[妙記念館本] あたはし　辟支佛の利智にして無漏の最後身なる　また・十方界にみちて・　そのかす竹林の
[足利本] あたはし・　ひやくしふつのりちにして・むろの・さいごの身なる・又　十方かひにみちて・　そのかす・たけはやしの

斯等 共一心　於億無量劫　欲思佛實智

[山田本] 如(ク)あらむ　斯等い共に心を一(ニシ)て[於]億尼量劫に　佛の實智を欲ー思(ハ)ムとも

[龍光院本] 如(クア)らむ　斯等の共に心を一(ニシ)て[於]億無量劫に　佛の實智を思(ハム)と欲(フ)とも

[書陵部本] 如(クアラム)　斯等 共(ニ)心を一(ニ)シて[於]億尼量劫に　佛(ノ)實智(ヲ)思(ハムト)欲フトモ

[立本寺本] 如クアラム　斯等 共に心を一(ニシ)て[於]億無量劫に　佛の實智を思ハムト欲フとも

[防府本墨書] 如クアラム　斯等 共に心を一(ニ)して[於]億無量劫に　佛の實智を思(ハム)とも欲(フ)とも

[防府本山門聚] 如(クナラム)　斯ー等 共ニ一心ニ　億無量劫ニ於テ　佛ノ實智ヲ思ハムト欲(フ)トモ

[倭点本] 如クナラム　斯ー等 共ニ一心ニ　億無量劫ニ於テ　佛ノ實智ヲ思ハムト欲(フ)トモ

[妙記念館本] ことくならん　これらともにこころをひとつにして・　億無量劫におきてほとけの實智をおもはむとおもふとも

[足利本] ことくならん・これらともに心をひとつにして・をく無量こうに・おきて・ほとけのしつちを・おもはむと・おもふとも・

莫能知少分

[山田本] 少分をタニ知(ル)こと能(ハ)莫なり

[龍光院本] 能(フ)少分を知(ルコト)莫(ケ)む・

[書陵部本] 能(フ)少分をモ知(ル)コト莫ケム

[立本寺本] 能ク少分をも知(ル)こと莫ケム・

[防府本墨書] 能ク少分をも知(ル)ことも莫ケム

[防府本山門聚] 能(フ)少分ヲ知ルコト莫(ケム)

[倭点本] 能ク少分ヲ知ルコト莫ケム

[妙記念館本] よく少分をも しることなけん・

[足利本] よくせうぶんをも・しることなけん・

〈訓読文例二〉　佛復止舍利弗　若説是事　一切世間天人阿修羅　皆當驚疑

[山田本]　佛復　舍利弗を止(メ)タマフ　若(シ)是の事を説かは一切世間の天ト人ト阿脩羅トは皆當に驚疑し

[龍光院本]　佛復　舍利弗を止(メタマ)はく　若(シ)是(ノ)事を説かは一切世間の天人　阿脩羅　皆當(ニ)驚疑(シ)

[書陵部本]　佛復　舍利弗を止(メ)タマハク・若シ是の事を説カハ・一切世間の天人　阿脩羅は・皆　當に驚き疑(ヒ)

[立本寺本]　佛復　舍利弗を止メタマハク　若(シ)是の事を説かは一切世間の天人　阿脩羅は皆　當に驚疑シ

[防府本(真言宗)]　佛復　舍利弗を止(メタマハク)・若(シ)是の事を説かは・一切世間の天人　阿脩羅・皆　當に驚疑(ス)

[防府本(山門派)]　佛復(シテ)　舍利弗ヲ止メタマハク　若シ是ノ事ヲ説カハ一切世間ノ天人　阿脩羅　皆　當ニ驚疑ス

[倭点本]　佛復(シテ)　舍利弗ヲ止メタマハク。若シ是ノ事ヲ説カハ・一切世間ノ天人　阿脩羅・皆　當ニ驚疑ス

[妙記念館本]　ほとけまた　舍利弗(しやりほつ)をとめたまはく・もし　このことを　とかは・一切世間(さいせけん)の天(てん)人(にん)　阿修羅(あしゆら)　みな　まさに・驚疑(きやうぎ)し

[足利本]　ほとけまた・しやりほつを・とゝめたまはく・もし　このことを　とかは・一切世間の天・にん・あしゆら・みな　まさに・をとろき・

[山田本]　なむ・

[龍光院本]　ナム・

[書陵部本]　又(當ヘ)(再読)シ

[立本寺本]　增上慢の比丘は將に(於)大(キ)ナル坑に墜(チ)なむをもちてなうとのたまひキ

[防府本(真言宗)]　增上慢の比丘は將に(於)大(キ)ナル坑に墜(チ)なむ。

[防府本(山門派)]　增上慢の比丘は・將に(於)大(キ)ナル　坑ニ墜チナム・

[倭点本]　增上慢の比丘は　將に　大(キ)なる坑於(ニ)墜(チ)なむ。

[妙記念館本]　增上慢ノ比丘は將に(於)大(キ)なる　坑に墜チナムト・

[足利本]　增上慢比丘將墜於大坑

[山田本]　增上慢の比丘は將に(於)大(キ)ナル坑に墜(チ)なむをもちてなうとのたまひキ

[龍光院本]　增上慢の比丘は・將に(於)大(キ)ナル　坑ニ墜チナムト・

[書陵部本]　增上慢ノ比丘。將ニ(於)大　坑ニ墜チナムト(將)(再読)。

[立本寺本]　增上慢の比丘　將に　大(キ)なる坑に　おつへし・

[防府本(真言宗)]　增上慢の比丘・將に(於)大(キナル)坑に墜(チナムト)(將)(再読)・

[防府本(山門派)]　增上慢の比丘・將に(於)大(キナル)坑に墜(チナムト)(將)(再読)・

[倭点本]　增上慢ノ比丘　將ニ(於)大　坑ニ墜チナムト(將)(再読)シ

[妙記念館本]　增上慢ノ比丘。將ニ(於)大　坑ニ墜チナムト(將)(再読)。

[足利本]　增上慢の比丘　まさに・大坑に　おつへし・

[山田本]　ぬへし

[龍光院本]　うたがひしぬへし・そうしやうまむのひく・まさに・をゝきなる・あなにをつへし・

二、訓読文の比較とその整理

右の九種の、平安初期から鎌倉時代までの訓読文を相互に比較するに、語句によっては九種とも訓読の一致するものもあるが、諸種の相違も認められる。この相違に注目して整理すると、大きく三つの型に類別することが出来る。

〔A型〕山田本と、龍光院本以下八本との相違

1、読添え語の相違

a、山田本が読添えとして用いるが、龍光院本以下八本では用いないもの

㋑ マくのみ　い　ダニ　もちゐなうとのたまひキ

㋺ なり　あらむ　む　こと　ト…ト

㋑は、方便品を通じて龍光院本以下八本では用いないものであり、㋺は龍光院本以下八本において、比較した箇所には用いられないが、他の箇所では読添えとして用いられることのある語である。

b、山田本と、龍光院本以下八本とで読添え語の異なるもの

ひと（山田本）――もの（龍光院本以下八本）

2、助字の訓法

c、山田本が不読である助字を、龍光院本以下八本は一定の訓を与えて読む

〔及〕（山田本）――及ビ（オヨビ）（龍光院本以下八本）

d、山田本が辞の訓である助字を、龍光院本以下八本は詞の訓に読む

莫なり（山田本）――莫ナケム（龍光院本以下八本）

3、実字の訓法

e、山田本が和訓の字を、龍光院本以下八本は字音に読む

利キ智（山田本）――利智（龍光院本以下八本）

佛の智（山田本）――佛智（龍光院本以下八本）

f、和訓の相違

堪ヒ（シノビ）（山田本）――堪ヘ（龍光院本以下八本）

者（ひと）（山田本）――者（もの）（龍光院本以下八本）

〔B型〕山田本・龍光院本・書陵部本と、防府本以下五本との相違

g、助字の訓法（再読字の訓法）において、「當」「將」を山田本・龍光院本・書陵部本は一度しか読まないが、防府本以下五本は再読表現にする

當に…む（山田本・龍光院本・書陵部本）
―當（マサニ）（ベシ）（防府本以下五本）
將に…む（山田本・龍光院本・書陵部本）
―將（マサニ）（ムトス）（防府本以下三本。仮名書本は「待（マサニ）（ヘシ）」の古訓が「當（マサニ）（ベシ）」の訓法に引かれたもの）

尚、上本寺本は、「當」を再読するが、「將」は一度読みである。

〔C型〕龍光院本以下八本の間における差異

巨視的に眺めた場合、防府本（山門派）と倭点本とが酷似しており、これが、龍光院本・書陵部本・立本寺本・防府本（真言宗）の訓法と差異を見せている。

舍利弗ノ如ク及ヒ餘ノ諸ノ弟子ハ（防府本・山門派・倭点本）
舍利弗と及ひ餘の諸の弟子との如クシて（龍光院本・書陵部本・立本寺本・防府本真言宗）

利智ニシテ（防府本山門派・倭点本）
利智ありて（龍光院本・書陵部本・立本寺本・防府本真言宗）

大坑（防府本山門派・倭点本）
大きなる坑（龍光院本・書陵部本・立本寺本・防府本真言宗）

一心ニ億無量劫ニ於テ（防府本山門派・倭点本）
心を一（ニ）して「於」億無量劫に（龍光院本・書陵部本・立本寺本・防府本真言宗）

このような点から、仮名書法華経の妙一記念館本と足利本の訓読は、少異はあるものの、基本的には、防府本山門派・倭点本の訓法に近いことが分る。

尚、微視的に見れば、龍光院本・書陵部本・立本寺本・防府本真言宗の間にも差異が認められる。

右に整理した三つの型は、方便品の訓読文の全体にも適合する。ここではその全容を示すことが紙数の都合にて出来ない。若干を例示するに止める。

〔A型〕

1、読添之語の相違

a、山田本が読添之として用いるが、龍光院本以下八本では用いないもの

㋑ スラ　サヘ　シ（副助詞）　テシカ　ヲ（間投助詞）　ハベリ　イマス　オモホス

㋺ キ　タリ　ツ　ヌ　タマフ　タテマツル　マウス

b、山田本と、龍光院本以下八本とで読添え語の異なるもの

ラユ（山田本）―ラル（龍光院本以下八本）

マセバ…マシ（山田本）―セバ…ジ（龍光院本以下八本）

2、助字の訓法

山田本と、龍光院本以下八本とで異なるもの

不（山田本）―不（龍光院本以下八本）

不（山田本）―不（龍光院本以下八本）

―唯然（防府本以下五本）

尚、立本寺本も「唯然」の訓法である。

［C型］龍光院本以下八本の間における差異

特に、防府本（山門派）・倭点本に対する、龍光院本・書陵部本・立本寺本・防府本（真言宗）の差異

是（ノ事）云何トカ為ム（防府本山門派・倭点本）

是（ノ事）云何ト為に（龍光院本・書陵部本・立本寺本・防府本真言宗）

3、実字の訓法

e、山田本が和訓の字を、龍光院本以下八本は字音に読む

安詳（山田本）―安詳（龍光院本以下八本）

引導（山田本）―引導す（龍光院本以下八本）

錯乱（山田本）―錯乱（龍光院本以下八本）

f、和訓の相違

無（山田本）―無（龍光院本以下八本）

懐（山田本）―懐（龍光院本以下八本）

［B型］山田本・龍光院本・書陵部本と、防府本以下五本との相違

唯然（山田本・龍光院本・書陵部本）

是（ノ）究竟ノ法トヤ為ム（防府本山門派・倭点本）

為（メ）て是レ究竟の法か（龍光院本・書陵部本・立本寺本・防府本真言宗）

世ニ出現シタマフト為（防府本山門派・倭点本）

世に出現シタマフト為ノ（龍光院本・書陵部本・立本寺本・防府本真言宗）

この点から見るに、仮名書法華経の妙一記念館本と足利本の訓読は、防府本山門派・倭点本に一致している。

右の、A型・B型・C型の三つの型を、漢文訓読史から観るに、先ずA型は、第二段階の方法として、同一本

文の経典で平安初期加点本と院政期点本とを比較して得た変遷の類型に一致する。山田本が平安初期の加点であり、龍光院本以下八本が平安後期以降の加点である所から首肯される。即ち、A型は、平安初期と平安後期以降との訓読の変遷を示すものである。

次に、B型は、龍光院本と書陵部本とが平安後期の加点であり、それが山田本と同じ古訓法であることからすれば、平安後期には古訓法も残り、漢文訓読史から観ると、新旧の過渡的状態を示すものである。

第三の、C型は、防府本山門派と倭点本が天台宗の訓法と見られるのに対して、龍光院本・書陵部本・防府本真言宗が真言宗の訓法を伝えたものであり、立本寺本が南都の訓法に係ったものであるから、平安後半期における、宗派による訓法の差異を示すものである。

【注】

(1) 拙稿「漢文訓読史上の一問題―再読字の成立について―」(国語学第十六輯、昭和二十九年三月)。

(2) 拙稿「及字の訓読」(国文学言語と文芸第四号、昭和三十四年五月)。

(3) 拙稿「「らくのみ」「まくのみ」源流考」(文学論藻第八号、昭和三十二年十月)。

(4) 拙稿「古点の況字続貂」(東洋大学紀要第十二集、昭和三十三年二月)。

(5) 拙稿「助詞イの残存―平安時代の使用者と用法―」(東洋大学紀要第十三集、昭和三十四年五月)。

(6) 拙稿「漢文訓読史研究の一試論」(国語学第五十五輯、昭和三十八年十二月)。

(7) 拙稿「唐代説話の翻訳―『金剛般若経集験記』について―」(『日本の説話』第七巻、東京美術、昭和四十九年十月)。

(8) 拙稿「平安初期の角筆点資料」(国語学第七十八輯、昭和四十四年九月)。

(9) 拙稿「字訓の変遷」(『漢字講座3 漢字と日本語』明治書院、昭和六十二年十一月)。

(10) 拙稿「妙法蓮華経の訓読史から観た妙一記念館本仮名書き法華経」(『妙一記念館本仮名書き法華経―研究篇―』平成五年一月刊予定)。

(11) 大坪併治「山田本妙法蓮華経方便品第二試読」(訓点語と訓点資料第七輯、昭和三十一年八月)。尚、同誌には、築島裕・小林芳規の同古点釈文がある。

(12) 大坪併治『訓点資料の研究』(昭和四十三年六月)の「龍光院蔵妙法蓮華経古点」。

(13) 門前正彦「立本寺蔵妙法蓮華経古点」(訓点語と訓点資料別刊第四、昭和四十三年十二月)。

(14) 小林芳規・松本光隆「防府天満宮蔵妙法蓮華経八巻の訓点」(内海文化研究紀要第十二号、一九八四年)。

(15) 注(10)文献。

(こばやし　よしのり、徳島文理大学教授)

(平成四年十二月九日受理)